

インタビュー

坂田 泉 建築家 / 一般社団法人 OSA ジャパン会長 に聞く
—アフリカを舞台に建築家は考える「健全な環境で健康に暮らすために」—



坂田 泉 (さかた いずみ)

1955 年 東京都生まれ

1982 年 京都大学工学院研究科修士課程修了

1982 年 前川國男建築設計事務所入所

1994 年～1995 年 JICA (国際協力機構) 派遣専門家としてケニアのジョモ・ケニヤッタ農工大学において建築教育に従事

2000 年～2011 年前川國男建築設計事務所取締役役に就任

2011 年 一般社団法人 OSA ジャパンを設立、会長に就任。

(<http://osa-rainbow.com/>)

現在は、株式会社 LIXIL との「循環型無水トイレ・超節水型トイレ」プロジェクトや、株式会社 Looop とジョモ・ケニヤッタ農工大学とのソーラー関連技術の共同プロジェクト、株式会社ブレインワークスとの「住宅建築/人材育成」プロジェクトなどをケニアで進めている。公益社団法人日本建築家協会国際交流委員、法政大学大学院デザイン工学研究科非常勤講師、一般社団法人日本カルチャーデザイン研究所理事、一般社団法人アフリカ協会特別研究員を兼任。

主な著作：『ムチョラジ!』(求龍堂・2001年)、『幸せの器』(偕成社・2010年)

——「ものづくり」を身近に、絵や発明といった建築家向けの血をもって生まれ育つ

坂田：私は老舗の婦人帽子メーカーの息子として東京に生まれ、育ちました。たくさんの職人さんや美しい布や道具、材料、帽子、欧米のファッション雑誌などに囲まれ、美的感覚はもちろん、ものづくりの感性を身につけるには最適の環境でした。また、画学生だった母の影響か、絵を描くことは子どもの頃から得意で好きでした。それからもうひとつ、実は私は有名な「発明少年」でした。1960年代、小学校低学年の頃、毎年のように、全国的な発明コンクールで入賞、当時は世の中全般に発明とかアイデア商品がブームで、『アイデア買います』という人気テレビ番組もありました。私は、「発明少年」の噂を聞いたテレビ局からの求めに応じて、2回もその番組に出演しました。

高校の3年間は剣道漬けの毎日。朝練、昼練、放課後練、さらに夜は下高井戸の道場で特訓というような剣道少年でしたが、そういう日々を送りながらも、寒稽古の帰りに外苑の森で樹のスケッチをしたり、美術書や哲学書を読みふけったり、高校卒業の頃には、自然に建築の道に進むことを決めていました。文系理系を超越した湯川秀樹、今西錦司といった巨人を輩出した京都学派への憧れから、京都大学を志望。建築学科の募集要綱の「芸術的天分を有する学生も等しく歓迎する」という一文に強く惹かれたのも大きな理由でした。

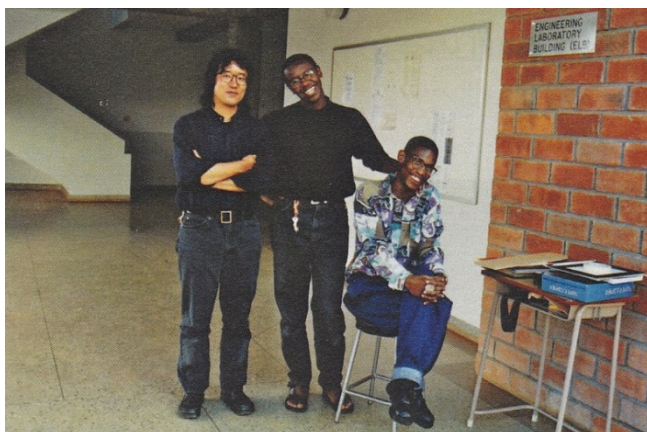
——ジョモ・ケニヤッタ農工大学で建築教育に従事

建築とは社会の全体に眼を向け、その力を活かすこと

坂田：建築というのは、他の専門的な工学分野とは異なり、社会における文化や風土の中で紡ぎ出される総合的な技術です。日本から持ち込んだ「近代的な技術や知識」をそのまま上から落とすように学生たちに与えることには迷いがありました。

現代の工業化社会では、世界のどこへ持っていっても通用するような建築技術というのもあり得るかもしれませんが、少なくとも私自身はそういう「根無し草」のような知識や技術を学生に与えることには抵抗がありました。

「根無し草」のような技術が生むものは、社会、文化が持つ固有の特性や可能性を封印し、世界を均一にしてしまうばかりか、技術者自身をも社会から遊離した根無し草にしてしまう。私はそんな学生を育てるためにケニアまで来たわけではない。私自身が、何を教えるべきかを悩み、迷いながら、大学へ通う日々の中で、活路として見いだしたのは、休日にスケッチブックを抱えて街を歩き、社会の底辺といわれるような場所でたくましく生きる人びとの姿を描き留めることでした。



ジョモ・ケニヤッタ農工大学にて（1994年-1995年）

——道端のスケッチが教えてくれたこと

坂田：そういう人びとは大学で教えられるような技術や知識とは無縁です。しかし、人びとは、今あるもの、今できることに眼を向け、独特な創造力で日々の暮らしを構築していました。普通の庶民が日々の暮らしで体現している力。そういう人びとの力を活かさない限り、ケニアという社会が、全体として豊かになることはないだろう、それが、私がケニアで悩み、迷いつつ、学生を教え、人びとを描きながら気づいた境地でした。



道端のスケッチ

とはいえ、たった一年の経験と時間です。私が学生に残せたのは、私が描きためた 90 枚近い人びとのスケッチの展覧会を開き、私自身がそうだったように、そういう人びとに眼を向け、人びとの力に気づいてほしいというメッセージだけでした。

その展覧会を最後に日本に帰国し、元の前川國男建築設計事務所に復職。日本国内の主に図書館や学校といった文化、教育施設の設計を続けるようになりました。

——ケニアで抱えた宿題を解くために「一般社団法人 OSA ジャパン」設立

坂田：私の心にはいつもアフリカがありました。「心にアフリカを持って」、それが当時の私の合言葉でした。日本のことを考える時も、いつも心の底にアフリカからの視点を持ち、何か自分にできること、提供できる視点がないかを探していました。

同時に、途上国の問題についての勉強会、研究会などに盛んに参加して、知識や人脈を増やしてゆきました。このようにして、後から気づけば、ケニアで抱えた「宿題」を解く準備を知らず知らずのうちに進めていたのです。

ケニアから帰国し15年を経た2011年1月、私は2人のケニア人、建築家の Dick Olango、エコノミストの Emmanuel Mutisya と共に、一般社団法人 OSA ジャパンを設立します。

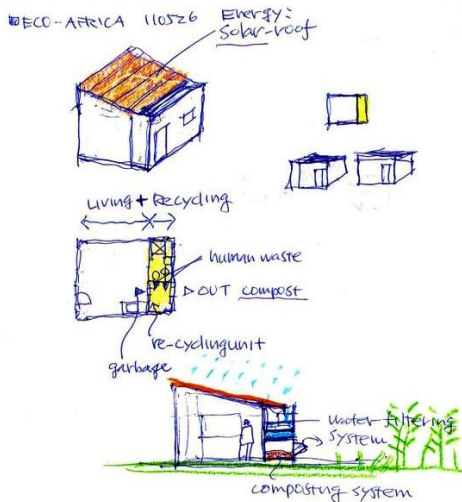
モットーは「日本のタネをケニアでカタチに」。製品になる前、製品のタネ、いわばエッセンスだけを日本からケニアに持ち込み、現地の人びとと力を合わせながらカタチにしてゆく、いろいろな分野の企業と現地のステークホルダーをつなげ、互いの力を合わせ、何か素晴らしいものを生み出そう、ということで、その活動全体を「虹プロジェクト」と呼んでいます。「虹」は何かと何かの間にかかるもの。私は、人と人、国と国の間には無限の可能性があると信じています。その無限の可能性を象徴するのが「虹」なのです。根底には、「現地の人びとの力をどう活かすべきか」という私のはるか20数年も前に道端で人びとを描きながら気づいたテーマがあります。建築家やエコノミストという自分たちの職能や人脈を活かしながら、現地のさまざまなステークホルダーとのネットワークの中で、日本から持ち込んだプロジェクトやプロダクトのタネを育ててゆきます。そうしたタネをカタチにするプロセス全体を私たちは、「ソーシャルデザイン」と呼んでいます。



左から Emmanuel Mutisya・坂田 泉・Dick Olango

——デザインは、ソシアライズ（社会化）されて初めて広く、深く根を張れる

坂田：私は本来、デザインというのは、特定の社会や文化の中で成立するもので、どこへ持っていても通用するデザインというものはないと思います。そういう理念の下、株式会社 LIXIL と共に、ケニアにおけるトイレのプロジェクトを進めてきました。電気や上下



インフラフリーユニット (スケッチ)
型トイレ」と、いわば車の両輪のような一対の取り組みです。

一方、日本のソーラーパネルメーカー、株式会社 Loop とは、2015年5月から、私の古巣のジョモ・ケニヤッタ農工大学で、ソーラーエネルギーと農業とを組み合わせた「ソーラーシェアリング・プロジェクト」を進めています。ソーラーパネルを農地の上空に設置し、日影の効果を農作物に与えながら、発電した電力を点滴灌漑などに利用する。太陽エネルギーを農作と発電でシェアするので「ソーラーシェアリング」と呼ばれています。

また、健康に関わる分野では、沖縄の伝統的有用植物である「月桃」による健康志向商品の開発をケニアで進めています。もともとは、美容家の桜香純子さんから、ケニアにおける社会貢献事業としてご相談があったものです。「月桃」は、「Shell Ginger」の名前でケニア



でも広く普及していますが、もっぱら観賞用で、十分に活用されているとは言えません。そこで、ケニアの農業法人と協力しながら、2015年7月から、現地で月桃を育て、お茶や健康補助食品、化粧品等の開発を進めてきました。一昨年のナイロビでのTICAD6の会場では、ケニア産の月桃ティーを来場者に試飲して頂き、とても好評でした。

月桃プロジェクト

水道等のインフラが整備されていない地域に人間が居住するための「インフラフリーユニット」の提案がきっかけでした。これには無水トイレだけでなく、水の浄化システム、電気を貯めるバッテリーが組み込まれています。「インフラフリーユニット」を住宅とは切り離して製造、設置することで、インフラ未整備地域における人間の居住を実現しようというアイデアでした。

「循環型無水トイレ」とは、いわゆるコンポスト型のトイレで、尿尿を堆肥化し、農業や土壌改良に活用するものです。したがって、堆肥として利用がしやすい農村部での展開を前提としていました。農村部には「循環型無水トイレ」、都市部には「超節水型トイレ」と、いわば車の両輪のような一対の取り組みです。



ソーラーシェアリング・プロジェクト

——健全な環境で健康に暮らすための仕組みづくりをアフリカで

坂田：今回新たに、株式会社ブレインワークスをパートナーに、住宅建築と人材育成をテーマにしたプロジェクト「住宅建築における安全化、省エネ・省資源化、衛生化へ向けた産業人材育成のための案件化調査」（対象国：ケニア）が JICA の「案件化調査プロポーザル」に採択されました。

住宅建築をテーマにすることは、建築家の私にとっての念願でした。もともと「インフラフリーユニット」のアイデアも無水トイレ



インフラフリーユニット（模型）

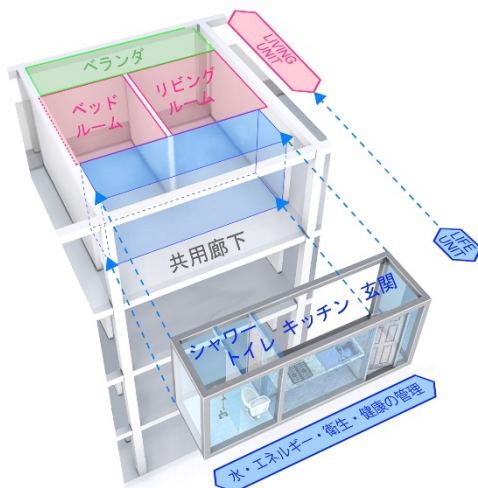
だけを対象にしていたわけではなく、エネルギー、水、廃棄物という要素を、独立した自立型のユニットによってコントロールしながら、人間が健全な環境で健康に暮らすための仕組みづくりがテーマでした。

アフリカにおいて、生命と生活を家に再統合したい、単なる生活の器ではなく、人間が命を健全に保ちながら生きるための住居をつくるためにどうすればいいのか。

日本には、水、エネルギー、保健衛生、医薬医療に関わる優れた製品やサービスがあります。LIXIL の「無水循環型トイレ」、「超節水型トイレ」だけでなく、ウエルシィの「浄水設備」、関西ペイントの漆喰をベースにした「空気清浄塗料」（月刊アフリカニュース No. 48）、また、

さまざまな健康志向商品や、ICT や IoT の技術による健康管理、医薬・医療サービスなど、アフリカでの普及を試みる動きも少なくありません。

これらの製品、サービスは、個々の機能は優れていますが、個別に販売、普及するとすると、どうしても価格がネックとなります。そこで、私たちは、これらの製品、サービスを住宅建築に結集して、相乗効果と効率化を狙うと共に、住宅全体への対価の中に位置づけることで、個々の価格に対する高価値を取り除くプロジェクトを考えています。技術の統合によって、人間の生命と生活



生命と生活を共に守る住宅（コンセプト）

を共に守る住宅を目指すのです。2030 年を目標に、こうした住宅建築を、建設や普及に必要な人材の育成も含め、ケニアからアフリカ各地に広げてゆくこと。これが私たちの構想です。今回のプロポーザル採択は、その出発点になります。

「建築」の語源は、「諸技術を統合する技術」です。2011 年 1 月の OSA ジャパンの設立以来、私たちは、再生バッテリー、トイレ、ソーラー、健康といったテーマを個別に追いかけてきました。これからはそれらを「建築」に統合します。OSA ジャパン設立から 7 年、私たちは「建築」の本来の意味にふさわしい広大な海に漕ぎ出してゆきます。

（インタビュアー：清水 眞理子）